

8611 父は、小学校の成績がよく、いつも首席で、・・・

父は、小学校の成績がよく、いつも首席で、上の学校に進みたいと思っていたのだが、両親が許してくれなかつた。進学できなかつたことは、一生を通じての心のこりであつたらしい。もし、自分が上の学校に進んでいたら、今のような下積みの生活をしなくともすんだにちがいない、と考えると、子供には、この気持を味わわせたくないと思った。そして、私たちに、大学教育を受けさせようとしたのだ。父は、なんども繰り返して、私たちにそういつた。私の父は、今の教育パパのはしりだったのである。

なだ いなだ『親子って何だろう』

#### [許容訳例]

My father did well in elementary school and was always first in his class, so he wanted to continue studying at middle school, but his parents did not allow him to. Throughout his life, it seems, he regretted that he has failed to go on in the next stage of his education. Feeling that if he had gone on to middle school, he would not have lived such an obscure life, he didn't want his children to savor his same experience. That was why he wanted to have us educated at university. My father told us this over and over again. He was the first "education-minded" father.

#### [翻訳例]

My father, who did well at primary school and was always at the top of his class, wanted to go on to middle school, but his parents did not let him. All his life, it seems, he regretted his failure to continue his education. The idea that if he had gone on to middle school, but his parents let him. All his life, it seems, he regretted his failure to continue his education. The idea that if he had gone on to middle school he almost certainly would not have led a life of such obscurity made him feel that he did not want his children to go through the same experience. That is why he wanted us to have a university education. He told us so over and over again. Father, in short, was a forerunner of today's "education-minded father".

■父は、小学校の成績がよく、いつも首席で、上の学校に進みたいと思っていたのだが、両親が許してくれなかつた。(8611)

★「小学校の」は「小学校で」として at primary [elementary] school です。「小学校」は、病院 hospital とか郵便局 post office とかと違つて無冠詞です。

★「成績がよかった」は did well とか got good marks [grades] です。なお、次の「いつも」に引かれて was doing well と過去進行形にする必要はありません。過去進行形には必ず「時」が必要です。たとえば、My father was doing well...when his own father died and he had to...のように。

★ 「いつも首席であった」は was always first in his class ですが、「いつもトップだった」という意味でもあるので was always at the head [ top] of his class でもいいでしょう。あるいは ranked highest in his class もいいです。

★ 「上の学校」に相当する英語はありません. (the) upper school という範疇はないし, a higher school という言い方もないで、ここは middle school にします。

★ 「上の学校に進みたいと思っていた」は、したがって, he wanted to continue studying at middle school ぐらいになります。なお、動名詞 studying を his study としても構いません。

★ 「両親が許してくれなかった」は his parents would [did] not allow him to… としても間違いではありませんが、allow を使うと「いけません」という度合いが強くなる上に、「学校に行かせてやれるのに行かせてやらない」といった禁止のニュアンスが含まれてしまいます。ここは his parents would [did] not let him to…の方がいいです。

#### ●文構造 ([連用形]・[で]・[のだが]などの処理)

「父は、小学校の成績が【よく】、いつも首席【で】、上の学校に進みたいと思っていた【のだが】、両親が許してくれなかった。」は「A【よく】(and)B【で】(and), C【のだが】(but)D だった」でもいいのですが、よく読むと、「A and B」が一塊で、【で】は【ので】の意味を含んでいます。したがって、「A【よく】(and)B【ので】(so), C【のだが】(but)D だった」という構造 (A と B ので、C のだが、D だった) にするのが「私の父は…なので、…したかったのだが…だった」という日本文に近いと思います。なお、理由を表す A and B の部分は My father, who did well at primary school and was always at the top of his class, wanted…と関係代名詞節にすることも出来、さらに、それによって「強(My father…)+弱(who…)+強(wanted…)+強(his parents did not…))」というように、文章に情報の強弱を付けることが出来ます。

■進学できなかつたことは、一生を通じての心のこりであったらしい。(8611)

★ 「進学する」は、辞書には go on to the next stage of one's education と出ていますが、ここでは go on to the next stage とか、もっと簡単に continue one's education としてもいいです。なお, the next stage の代わりに the higher stage がまれに使われることがあります。

★ 「…できない」は、ここでは「能力」ではなく「思う通りにいかない」ことを言っているので fail を使って処理するのが最もいいでしょう。

★ 「一生を通じて」は all one's life とか throughout one's life です。また、ここでは「一生涯死ぬまで」とも解釈できるので as long as one lived を使ってもいいでしょう。

★ 「心のこりである」は regret that…か、fail を名詞形 failure で使うなら regret his failure to…です。

★ 「…であったらしい」は途中に it seems と挿入するか、it seems he regretted…とか he seems to have regretted…です。

#### ●日本文の解釈と英文の構造

「進学できなかつたことは、一生を通じての心のこりであったらしい」は日本語として通

じますが、ちょっとぎこちなさを感じます。しかし、その‘ぎこちなさ’まで訳出する必要はないと思います。ここは「一生を通じて、進学出来なかったことが心のこりであったらしい」と普通の配列に直して、Throughout [All] his life, it seems, he regretted his failure [that he had failed] to continue his education.とする方がいいです。また、格助詞 [が] を使うことによって「進学出来なかったこと」を主語にしたので、英語でも His failure …を主語にして His failure to continue his education, it seems, was a source of regret to him all his life.とすることも出来ます。なお、理想的な表現ではありませんが、Not having continued his education …も英語としては使えます。

■もし、自分が上の学校に進んでいたら、今のような下積みの生活をしなくともすんだにちがいない、と考えると、子供には、この気持を味わわせたくないと思った。(8611)

★「今のような」は「現在しているような」とするなら as…as he is doing であるし、単に such…とすることも出来ます。

★「下積み生活をする」は live an obscure life とか live in obscurity; lead a life of obscurity など。他に be at the bottom of the pecking order とか live such a life at the lowest level society も可能ですが、前者はここで使うにはちょっと特殊な感じですし、ちょっと強過ぎます。この pecking は「鳥がくちばしでつつく」という意味ですが、この表現の由来は‘ニワトリの社会では上のものが弱いニワトリをつつく’ということのようです。なお、「今のような下積み生活をする」に as…as を使うとすると live as obscure a life as he is doing のように形容詞を前に出さなくてはなりません。

★「(もし…なら…に) 違いない」に、ここは仮定法なので must not …は使えません。he would not…でいいのですが、「違いない」を入れたければ he almost certainly would not …とすればいいでしょう。

★「…と考えると」は think でも feel でもいいと思います。

★「この気持」は「父親が持ったのと同じ気持ち」ですから the same feelings he had had; the same feelings as himself となります。また、単に the same experience [feelings] とするだけでもいいでしょう。なお、「…と考えて」に feeling を使った場合には feeling の反復を避けるために regrets を使うといいでしよう。

★「味わう」は have でもよいし、experience でもいいです。あるいは savor; go through も使えます。

### ●日本文を補って訳す

「もし、自分が上の学校に進んでいたら、今のような下積みの生活をしなくてすんだにちがいない、と考えると、子供には、この気持を味わわせたくないと思った」の文は、唐突に作者ではなく、作者の父親の意見になってしまっています。英文としては、この父親の意見を、客観的な文にして地の文にします。父親を he として「彼は、もし、自分が上の学校に進んでいたら、今のような下積みの生活をしなくてすんだにちがいない、と考えて、子供には、この気持を味わわせたくないと思ったのだろう」と補います。その上で、まず、「もし、…

と考えて」ですが、ここでは Feeling that if he had gone on to middle school, he almost certainly would not have lived as obscure a life as he was doing [have lived such an obscure life/ have led a life of such obscurity ],とします。あるいは the idea を主語として The idea that if he had gone on to middle school he almost certainly would not have led a life of such obscurity made him feel…とすることも出来ます。なお、「…と考えて」を「…と考えた結果」と解すると Having thought [felt] that…としたくになりますが、ここではちょっと無理です。完了の分詞構文を使うと、「(…の行為) の結果として…ということになった」という意味になります。たとえば、Having spent all his money, he was unable to go home by train.のように。

■そして、私たちに、大学教育を受けさせようとしたのだ。(8611)

★「そして」は前の文章を受けて「だから」という意味合いがあるので、「だから」を含まない and ではなく That is why…を使うのが最適でしょう。

★「～を受けさせようとした」は、全体の文脈から「受けることをすすめた」とどることができます。したがって he wanted [urged] us to have a university education あるいは he wanted to have us educated at university でしょう。この「…しようとした」に tried to は使えません。これは「…しようとしたができなかった」という意味になってしまいますからです。

■父は、なんども繰り返して、私たちにそういった。(8611)

★「なんども繰り返して」は over and over again とか time and again です。

★「私たちにそういった」の「そういった」は、ただ単に「大学にいけ」とだけいったのか、それとも「同じ思いをさせたくないから、大学にいきなさい」のように、これまでの内容をすべて含んでいったのかとらえにくいですが、ここでは後者で解釈した方がいいでしょう。He told us so over and over again [time and again].でもいいですが、後者の解釈をとると、That is why he urged us to have a university education, as he told us over and over again .となります。

■私の父は、今の教育パパのはしりだったのである。(8611)

★「私の父は…」の「は」には、「要するに、私の父は」のニュアンスが感じられますから、ここでは In short, he…あるいは Father, in short, …としたくになります。

★「教育パパ」は“education-minded [conscious] father”ですが、“education-papa”してもいいでしょう。なお、ダブルクオーツは「いわゆる」という感じを表すために使ったのですが「今の」(today's)も含ませることが出来ます。

★「はしり」は a forerunner of ~ですが、the first ~という言い方も可能です。